

# ひかりのこ

2月園便り

認定こども園  
聖ミカエル幼稚園  
2021年1月22日

月主題：つながる

## 「私たちが学ぶ意味」

私たち聖ミカエル幼稚園の職員は、毎月の職員会議で、本を読み、考えを深める研修を行っています。本は、一年以上かけて一冊読むことにしています。昨年までは、『新キリスト教保育指針（キリスト教保育連盟）』を読みましたが、この1月からは『発達の子（白石正久）』を読んでいます。この本は、乳幼児の発達について、難しい専門用語を連ねるのではなく、子どもたちの「成長したいという心」とそれが現れる「表情」に注目して書かれています。ですから、全ページ子どもたちの表情をとらえた写真が載っていて、かわいいし、大変説得力があります。

サーッと読んでも面白いのですが、担当者を決め、レジュメを作って読み進めていくと、大切な部分がクローズアップされて、学びが深まります。

1月は、園長の私がレジュメを作りましたが、まとめながら筆者の子どもを見る目の温かさに、感動しました。

子どもは、「〇〇みたいにできるようになりたい。」という発達の願いと、今の自分の力との矛盾を乗り越えて発達していく。だから保育者は、子どもをよく見て、乗り越えられるような、「発達の一歩前」の活動を用意し、心を支えてあげること。そして、子どもがその壁を乗り越えられたとき、その結果や達成感を共に喜んであげること。決して、「〇歳だからこれができて当然」というように、子どもに強要することがないように。まずは、子どもの心の中からその願いが出てくるような保育を用意すること。

障がいを持った子どもたちは、発達の願いを実現するための壁と、障害によってつくられている苦手意識の壁、という「二つの試練」に立ち向かっている。保育者には、「障害があっても、だんだん乗り越えていくことができるものなのだ。」と子どもに実感させてあげられるような指導が求められる。

子どもと共にいる保育。子どもの心に寄り添う保育。まさに、

ミカエルの先生たちがいつも目指している保育の理念です。この良書を、保育の先生だけでなく、チャプレン、事務、補助の先生たちもみんなで共に読み、心を一つにしていきたいと考えています。私たちが学び続けるのは、目の前に子どもたちがいてくれるからです。よく読んで、たくさん考えて、話し合っ、実践につなげていきたいと思ひます。

園長 渡部 良子

## キリスト教保育

### 「自分の言葉を語ること」

むかし、僕も卒業した牧師を養成する東京の神学校で、当時の校長先生が、卒業礼拝の説教でこう語りました。

イエス様が弟子たちを派遣する時、弟子たちを心配して、「狼の中に羊を送り込むようなものだ」と言われた。しかし、いま君たちを卒業させるのは、羊の中に狼を送り込むようなものだ。これは「名説教」として今でも語り継がれています。若くて生意気で、自分は何でもできると張り切っている奴ほど謙虚であれと、ジョークを交えて伝えたのです。これとは逆に牧師の世界では「迷説教」というのがあり、何を言っているのか分からない、語る本人だけが満足している、言葉の中にその人がいないということを指します。かくいう僕も幾度となく迷説教をしてきました。

こんなことを思い出したのは、いま政治のリーダーの言葉の危うさが指摘されているからです。もっともなことだと思ひます。こんな非常時に、迷説教のようなことばかり言われても、国民は聞く耳を持たないからです。とはいえ、問われているのは政治家だけではありません。私たち自身も、生活の場で自分の言葉が自分のものか、ちゃんと相手に伝わる言葉を発しているか、これを機に振り返ってみたいと思ひます。自戒を込めて。

チャプレン 司祭 下澤 昌